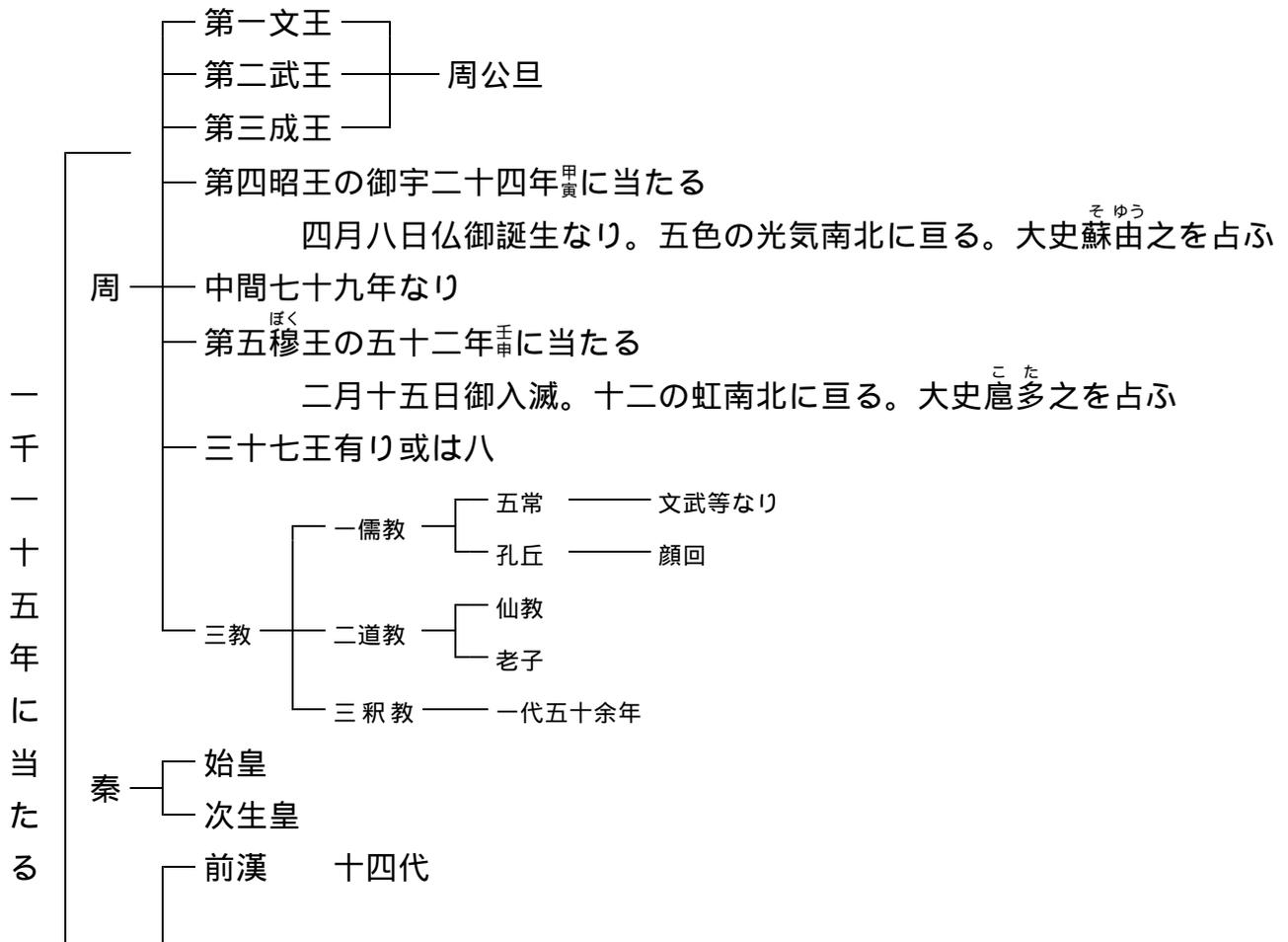
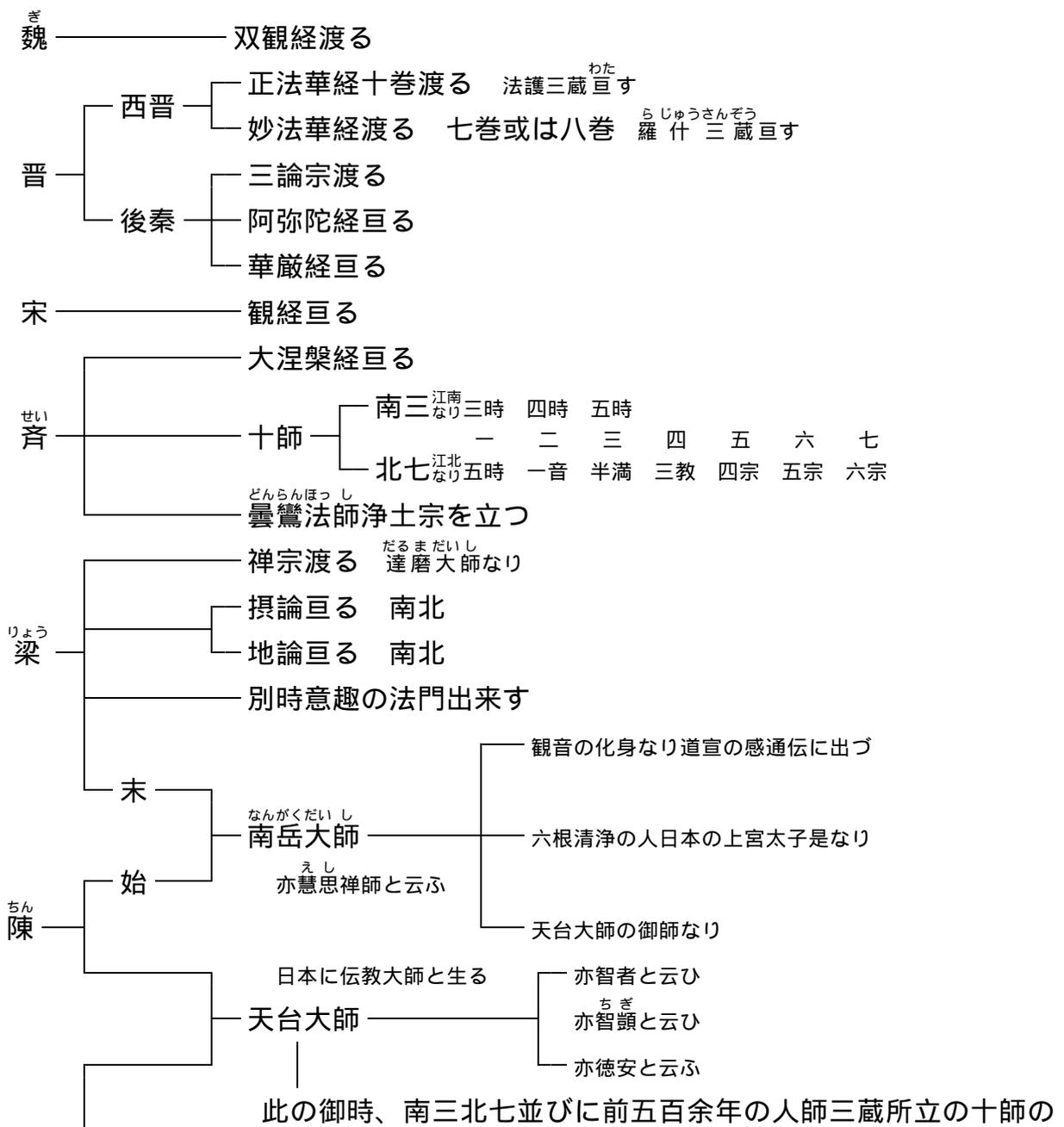
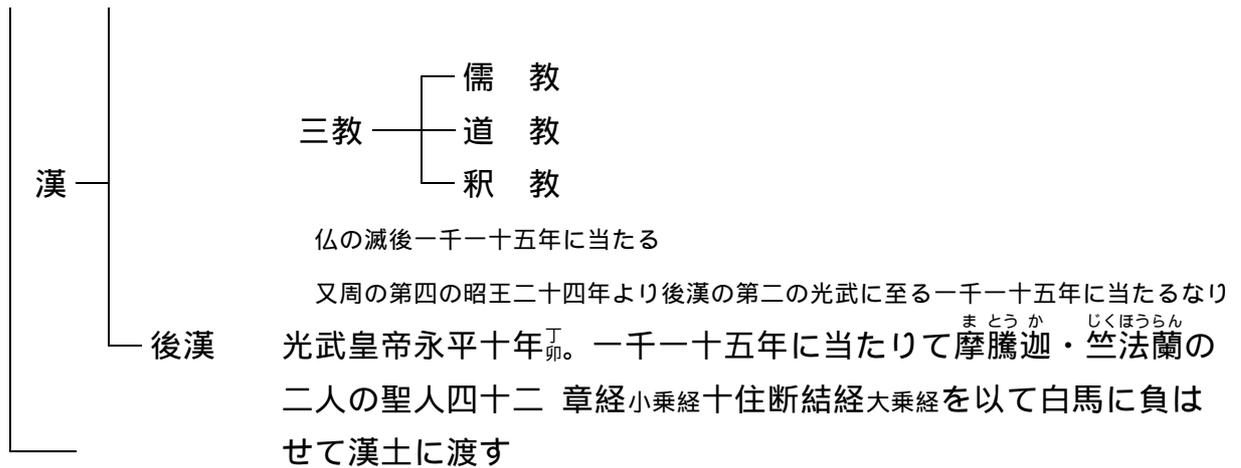
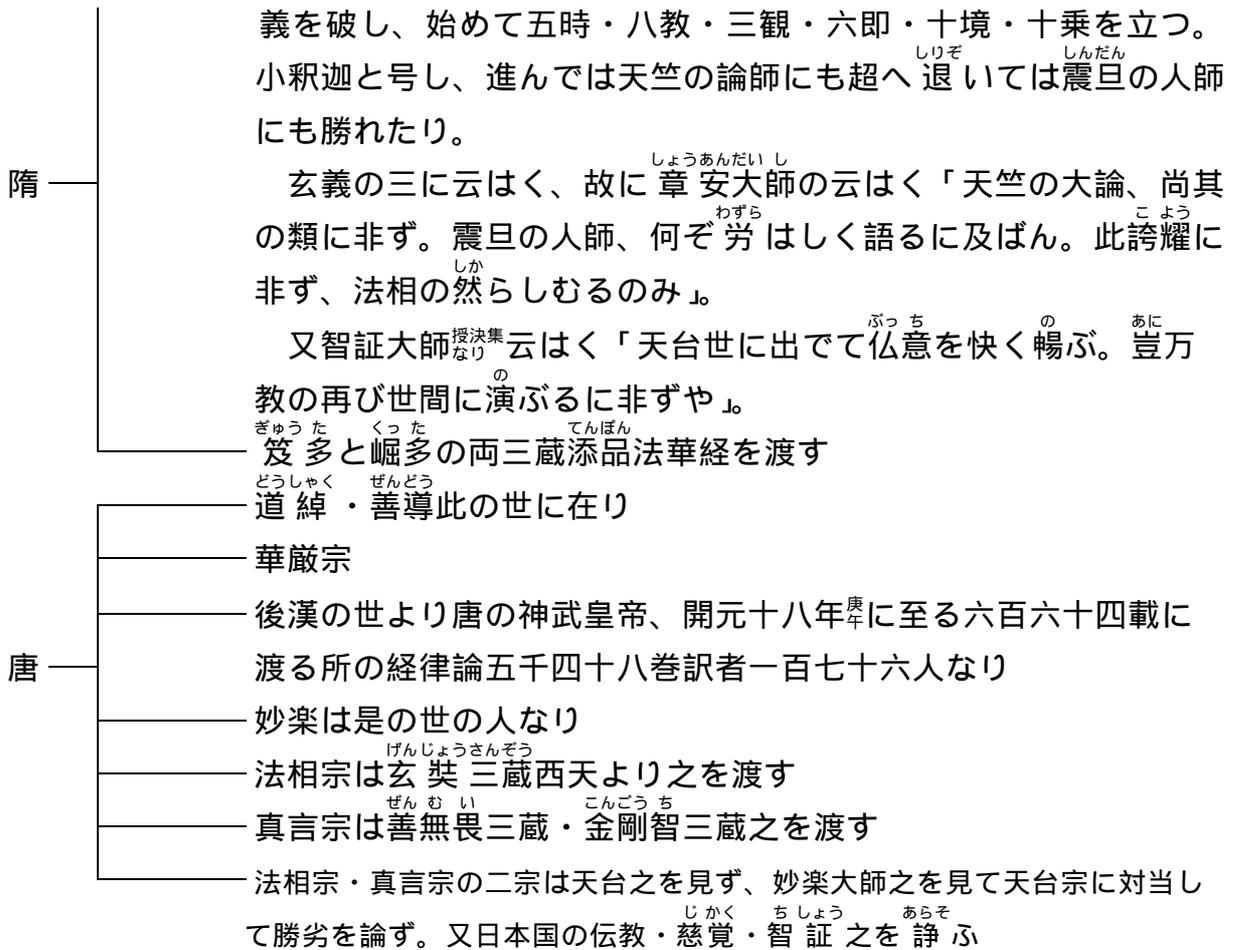


か夏

いん殷







宋

天台の玄義の十に南北の十師を破して云はく「但聖意幽隱にして教法 弥 難し。前代の諸師或は粗名匠に承け、或は思ひ袖衿より出づ。阡陌縦横なりと雖も、孰れか是なるを知る事莫し。然るに義双び立たず、理兩つ存すること無し。若し深く所以有って復修多羅と合する者は録して之を用ひよ。文無く義無きは信受すべからず」。

籤の十に云はく「一として全く是なること無きを以ての故に一々に難破す」。

玄の三に云はく「輕慢止まざれば舌口中に爛る」。又云はく「法華は衆經を總括す」。

籤の三に云はく「已法華已前の華阿方般等の一切經今無量義經なり当涅槃經等の法華已後の一切經なりの妙、茲に於て固く迷へり。舌爛れて止まざるも猶華報と為す。謗法の罪苦長劫に流る」。

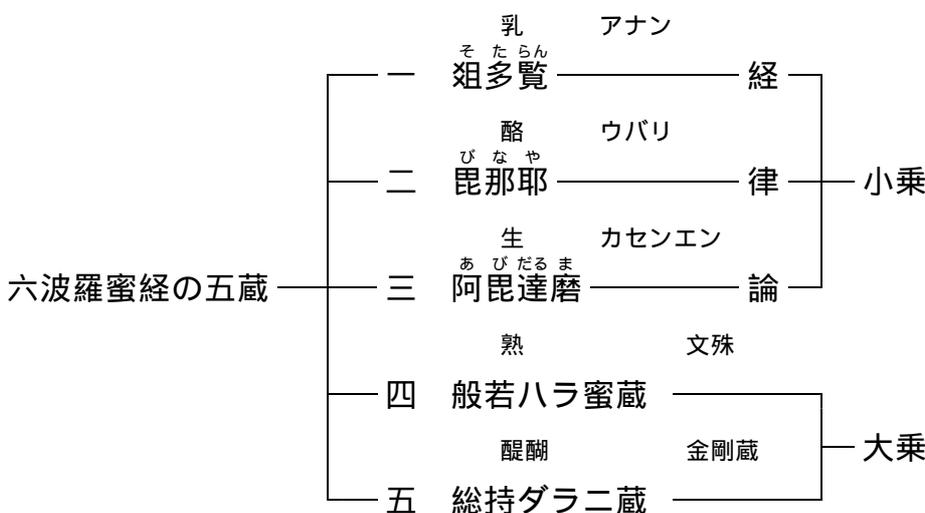
南三北七並びに華嚴宗の法蔵・澄觀、真言宗の日本の弘法等は法華經よりも華嚴經を勝るとするなり。又三論の嘉祥は法華經よりも般若經を勝るとす。又法相の慈恩等は法華經よりも深密經を勝るとす。又真言宗の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は法華經よりも大日經を勝るとするなり。此等の宗々の相違如何。相違如何。

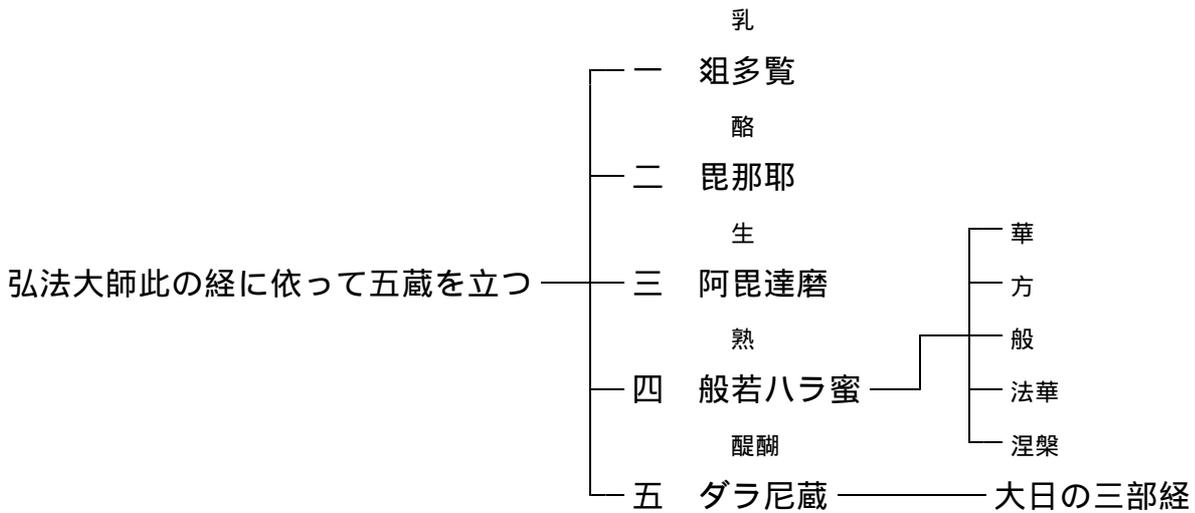
授決集に云はく円珍智証大師「文は大経に出でたり、人之を会すること無し。光は盲の前に在れども他に於ては無用なり。仏分明に五味の喩へを説き五時の教に喩へたまふ云云。訳有ってよりこのかた来、講者路に溢れども未だ曾て五味を談ずるの義を解せず、己が胸臆くおくに任せて趣爾嚙語す。何ぞ象に触るゝ衆盲の者に異ならんや。天台世に出でぶつち仏意の快く暢あにぶ。豈万教の再び世間に演ぶるに非ずや。南北の講匠にして経論を釈する者、各教時を立つれども百にして一も是なること無し。只教部の前後・頓漸・権実・大小・麁妙・寛狭・進否に迷ふに縁よつてなり。大教の網を張りて法界の海に亘し、人天の魚を済すくひて涅槃の岸に置く。斯くの如くするすら其の遺漏いろうを恐る。況んや諸師の輩あみは羅の一目なり。何れの時にか鳥を得ん。若し万蔵を暗くらんずと雖も此の理趣を会せざれば、年を終はるまで他の宝を計かぞへて自ら半銭の分無く、虚しく争論を益して長氷に水を添そふるのみ」。

授決集に法相宗の慈恩大師を破して云はく「五性宗の云はく、未熟法華論の前二未熟の文なりと言ふはまさ心に不熟と云ふべし。今謂はく、汎く法華を講ずるには須すべからく此の義を以て正と為すべし。若し爾しからずんば経を破し論を破する罪五逆に過ぎたり。基公を除きて外は人の彼の不熟の義を伝あなふること無し。若し強あながちに之を執せば公私十方の信施消し難し消し難し。若し消せずんば何ぞ三途を免れん。爾なんじを供養せん者は三悪道に墮せん。謗法の罪報は法華・般若の諸大乘経に一切明らかに説けり。智者は披ひらくべし。爾之を信受すべし。無間を招なかく莫れ」。

授決集円珍、真言等の請宗を徴めて云はく「真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等。若し法華・華嚴・涅槃等の経に望むれば是接引門なり」文。又云はく「大底他は多く三経に在り。円の旨至って少なきのみ」。

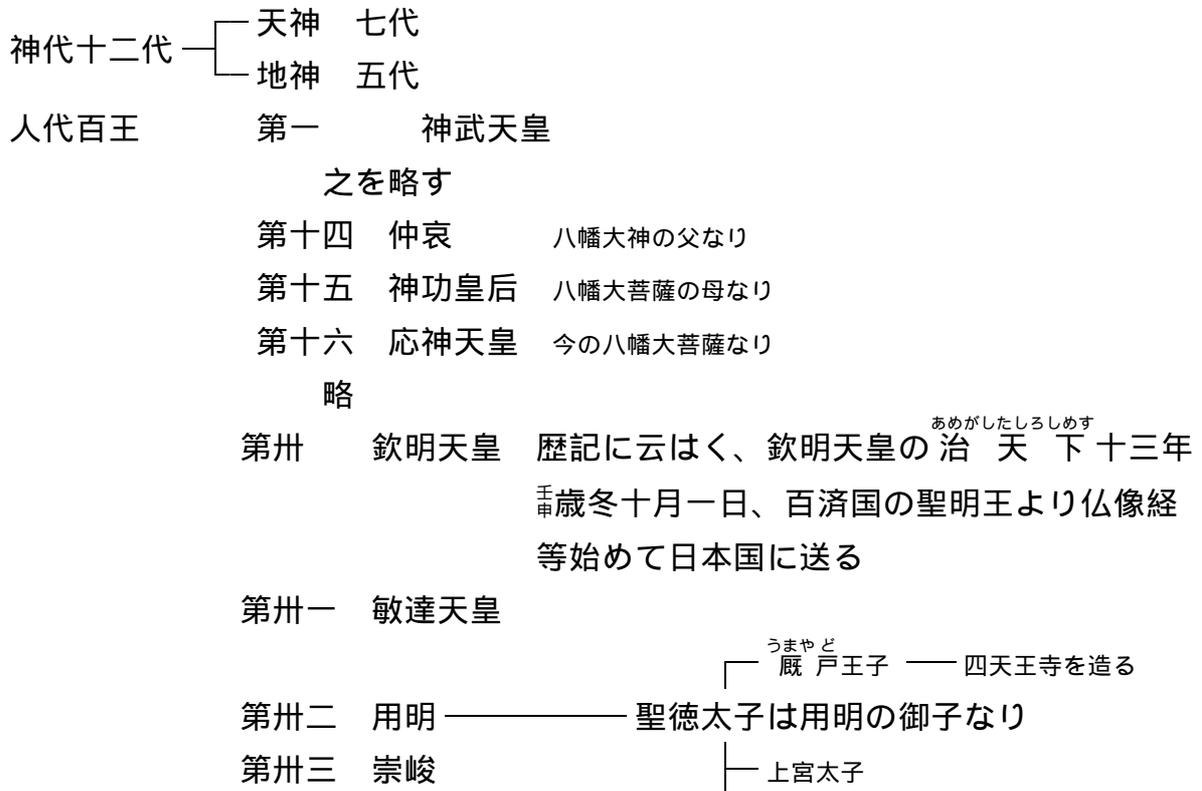
弘法大師の二教論に「さと喩して曰く、今斯の経文に依るに仏五味を以て五蔵に配当す。総持だいごは醍醐と称し、四味をば四蔵に譬ふ。震旦の人師等争って醍醐を盗み各自宗に名づく」。

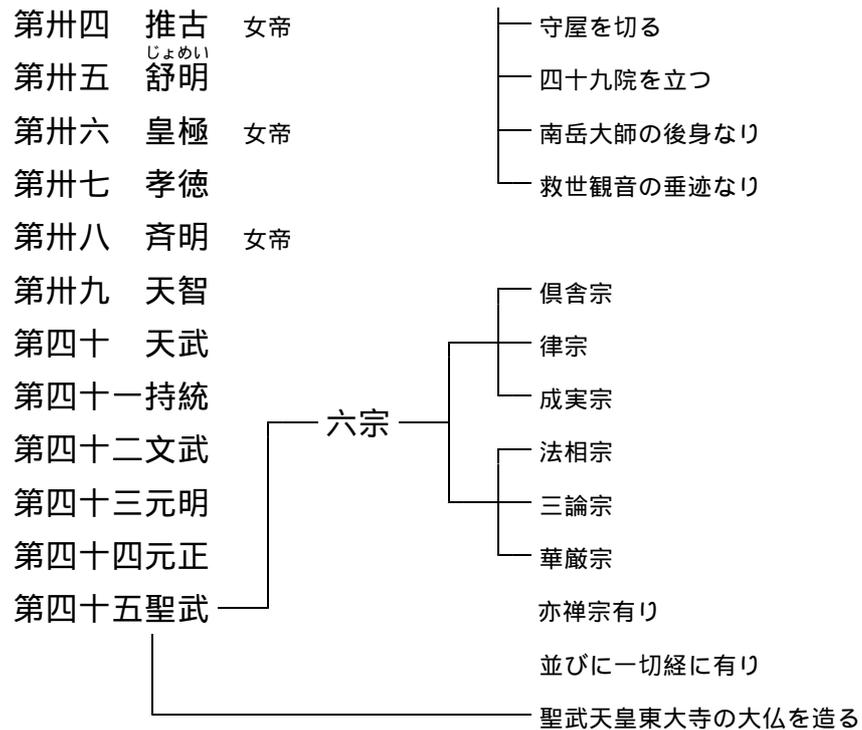




二教論に云はく「^{しかのみならず}加^{すす}以、釈教東夏に漸み微より著に至る。漢の明を始と為し周の天を後と為す。其の中間に翻伝する所皆是顯教なり。玄宗・代宗の時、金智・広智の日、^{うつ}密教鬱として起こり盛んに秘趣を談ず。新薬日浅くして旧痼未だ除かず。楞伽法^{りょうが}伝説法の文、智度性身妙色の句の如きに至つては、^{くおく}胸憶に馳せて文を会し、自宗に驅つて義^かを取る。惜しいかな、古賢醍醐^なを嘗めず」。

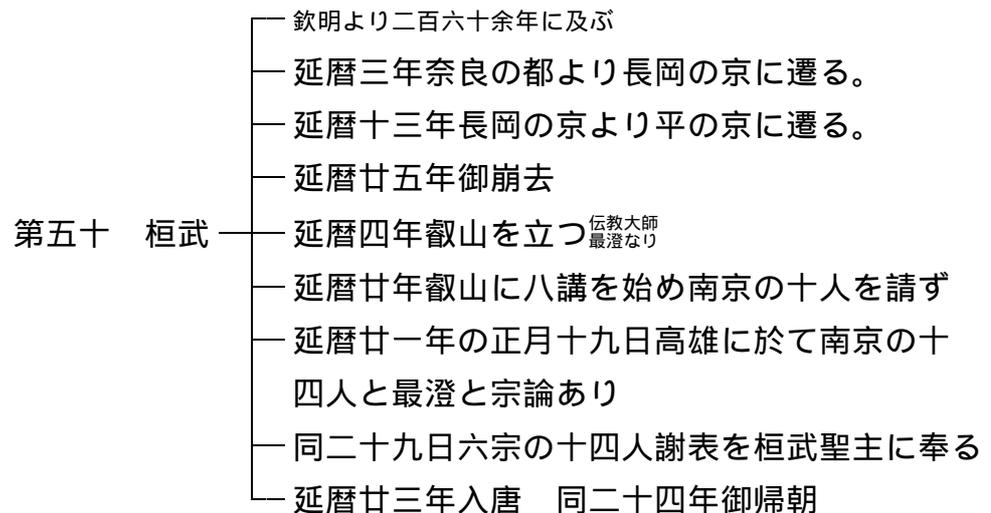
日本





欽明より聖武に至るまで二百四十余年なり。震旦国より鑑真和尚渡りて律宗を亘す。次に天台宗の玄・文・止等を渡す。又東大寺に小乗戒壇を立つ。

- 第四十六 孝謙 聖武の女
- 第四十七 淡路 廢帝
- 第四十八 称徳 孝謙又即位なり
- 第四十九 光仁 桓武の父なり



此の御時始めて伝教大師天台宗を立つ。四十余年の文を以て六宗を破り、始めて法華の実義之を顕はし、欽明より二百余年の邪義之を改む。

又六宗の碩徳たる勤操・徳円・長耀等の十四人桓武皇帝に謝表を奉りて邪見を翻す。

弘法大師空海は延暦二十三年御入唐、大同元年御帰朝伝教大師は山階寺やましなでらの行表僧正の御弟子、弘法大師は石淵いわぶちの勤操僧正の御弟子なり。

第五十一平城

第五十二嵯峨——弘仁十三年六月四日伝教大師御入滅。

同十一日戒壇を立つ

第五十三淳和

衆

秀句に云はく「法華経を讚むと雖も還つて法華の心を死す」文。

撰択集法然に云はく「捨閉閣抛」。

善導の礼讃に云はく「十即十生百即百生」。又云はく「百の時に希に一二を得、千の時に希に三五を得」。又云はく「千中無一」。

導綽の安楽集大集月蔵に云はく「我が末法の時の中の億々の衆生は行を起こし道を修するも未だ一人の得る者有らず。当今末法は是五濁の悪世なり。唯浄土の一門のみ有りて通入すべきの路なり」。

慧心の往生要集に云はく「利智精進の人は未だ難しと為さず。予が如き頑魯の者豈敢へてせんや」。



守護章に「正像やや稍過ぎ已おはつて末法はなは太だ近きに有り。法華一乗の機今正しく是其の時なり」。又云く「一乗の家都て用すべひず小乗権大乘四十余年の文、但し開し已はつて助道に用ふを除く」。